
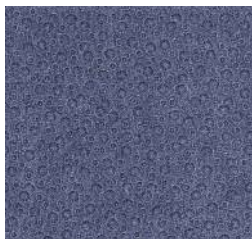



葛飾ゆかりの人

葛飾区の名誉区民とともに、区との関わりが深く全国的に知られた業績がある人物を「ゆかりの人」として紹介します。

	こみや やすたか 小宮 康孝 大正 14 (1925) 年～ 葛飾区西新小岩在住、制作活動	名誉区民 染色家 (江戸小紋)
	父の小宮康助が確立した「江戸小紋」の制作技法を継承・発展させた染色家。江戸小紋は、遠くからは無地に見えるほど細かい模様の反物である。微細で精緻な模様を手がけるとともに、自由な色彩で発色が鮮やかな色落ちのしにくい染め物を追求している。昭和 4 (1929) 年、父の作業場の移転に伴い南葛飾郡奥戸村 (現西新小岩) に移り住む。小学校 6 年生の夏休みに初めてヘラを持ち、卒業後に父のもとで小紋染の修業に入った。家業を受け継いだ後は染料の改良を行うとともに、古い型紙の収集や型紙職人との協力により江戸時代の模様を復元し、その保存と継承に熱心に取り組む。昭和 53 (1978) 年、父に続いて親子 2 代で重要無形文化財保持者 (人間国宝) に認定され、後に紫綬褒章、勲四等旭日小綬章を受章した。父から受け継いだ技術に改良を加えて洗練させ、さらにその技術を後継者へと伝えている。	




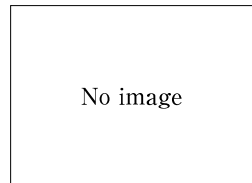
小紋染めの柄「唐松」

	ふくだ せんけい 福田 千恵 昭和 21 (1946) 年～ 葛飾区東立石出身、在住、制作活動	名誉区民 日本画家
	人物から風景まで幅広い対象を描き、その作品が高く評価されている日本画家。葛飾区立川端小学校卒業。武蔵野美術大学で日本画を学ぶ傍ら佐藤太清 (文化勲章受章者) に師事する。大学を卒業した昭和 44 (1969) 年、日本美術展覧会 (日展) などに入選した。平成 14 (2002) 年、サウジアラビア皇太子 (後に国王) に委嘱され、初代国王アブドルアジーズ・イヴン＝サウード「偉」を制作。平成 18 (2006) 年、「ピアニスト」で日本藝術院賞を受賞し、平成 21 (2009) 年には日本藝術院会員に選出された。日本画の世界発信にも尽力している。葛飾区文化会館に開館当初より展示されていた「蘭 (月光)」は、葛飾区の友好都市オーストリア・ウィーン市フロリズドルフ区の区制 100 周年記念として贈呈され、両区の友好の架け橋となっている。また、柴又にある山本亭のふすま絵「花菖蒲」を制作するなど区内各所で作品を目にすることができる。	




葛飾区亀有文化ホール緑橋の原画「清香」 (平成 7 (1995) 年)

	やまだ ようじ 山田 洋次 昭和 6 (1931) 年～ 葛飾区柴又を舞台とする映画『男はつらいよ』の監督	名誉区民 映画監督 脚本家
	国内外から高い評価を受けている、日本を代表する映画監督・脚本家。昭和 29 (1954) 年、助監督として松竹株式会社に入社。昭和 36 (1961) 年、『二階の他人』で監督デビューを果たす。原作・脚本・監督を務めた葛飾区柴又を舞台とする『男はつらいよ』は、昭和 44 (1969) 年に第 1 作が公開され、平成 7 (1995) 年まで 48 作品が公開される人気シリーズとなった。他にも多くの作品を手がけ映画の発展に尽くしたことから、平成 24 (2012) 年、文化勲章を受章した。山田洋次に「日本人の心の故郷」と言わしめた風景が広がる柴又は、映画『男はつらいよ』の主人公である車寅次郎の口上、「私、生まれも育ちも葛飾柴又です」とともに全国的に有名になった。また、平成 9 (1997) 年に開館し、名誉館長を務めている「葛飾柴又寅さん記念館」や、平成 24 (2012) 年に開館した「山田洋次ミュージアム」には多くの観光客が訪れている。	




『東京家族』映画撮影時の山田洋次

	あきもと おさむ 秋本 治 昭和 27 (1952) 年～ 葛飾区亀有出身	名誉区民 漫画家
	型破りな巡査長、両津勘吉が個性豊かなキャラクターたちと繰り広げる大騒動を描いた漫画『こちら葛飾区亀有公園前派出所』 (以下『こち亀』) の作者。昭和 51 (1976) 年 9 月より『週刊少年ジャンプ』で『こち亀』の連載を開始し、以降 40 年間一度も休載することなく週刊連載を続け、平成 28 年 (2016) 年 9 月に連載 40 周年を達成した。『こち亀』では葛飾区内の風景や人情がきめ細かく描かれており、作品の魅力の 1 つとなっている。台湾などでもアニメが放映されていたことから、海外での人気も高い。平成 18 (2006) 年以降、JR 亀有駅周辺に『こち亀』キャラクターの銅像が建てられ、その数は平成 28 (2016) 年までに 15 体となった。この他、『こち亀』ラッピングバスの運行、関連グッズの作成やイベントの開催など、『こち亀』は街のにぎわいを生み出している。『こち亀』のキャラクターとともに下町の空気を感じようと、区には国内外から多くの観光客が訪れている。	



「こち亀」で描かれた亀有駅北口の両津勘吉像
 © 秋本治・アトリエびーだま / 集英社

	<p>あおやま あきら 青山 士 明治 11 (1878) ~ 昭和 38 (1963) 年</p>	<p>土木技師</p>
<p>荒川放水路(現在の荒川河口から上流約22kmの間)の掘削工事を指揮</p> <p>荒川の下流部(現隅田川)で発生していた水害を防ぐため、荒川放水路(現在の荒川河口から上流約22kmの間)の掘削工事を指揮した土木技師。大学卒業後に渡米。明治 37 (1904) 年からパナマ運河の建設工事に参加し、完成間近の明治 45 (1912) 年に帰国した。この後、土木行政などを管轄していた内務省に入り、大正 4 (1915) 年から荒川下流部と放水路との分岐点になる岩淵水門(現北区)の設計・施工に当たる。大正 7 (1918) 年には荒川放水路工事の最高責任者となった。大正 13 (1924) 年、荒川上流と放水路がつながり、放水路に水が通されている。昭和 2 (1927) 年に青山が配置換えとなった後も関連工事が行われ、荒川放水路は昭和 5 (1930) 年に完成した。このように現在の葛飾区内を流れる荒川は、青山の指揮の下で造られた人工の川である。荒川放水路の完成によって現在の隅田川沿岸地域の水害は少なくなり、葛飾区域の水害の軽減にもつながった。</p>		



放水路を掘削する蒸気掘削機(大正時代)

	<p>いざわ や そ べ え た め な が 井澤弥惣兵衛為永 生年不詳~元文 3 (1738) 年</p>	<p>幕臣</p>
<p>小合溜井(現水元小合溜)と農業用水を整備</p> <p>18世紀初め、新田開発とこれに関わる治水工事などを行った幕臣。紀州藩の土木事業に従事した後、同藩で仕えた徳川吉宗が江戸幕府 8 代将軍となったことから、吉宗によって幕臣に取り立てられた。享保 14 (1729) 年、農業用水の水源として小合溜井(現水元小合溜)を整備する。「溜井」とは川をせき止めて造った水を溜めておく施設のことで、小合溜井が造られる前、葛飾区域には古利根川(現中川)をせき止めた亀有溜井が亀有村と新宿町の間にあった。しかし、堤の1つが洪水で流されたことから、井澤は亀有溜井を廃し、せき止めていた古利根川の川幅を広げて流れを元に戻す工事を行った。この後、上流の猿ヶ又(現水元)で東に向かい江戸川に合流していた古利根川をせき止めて小合溜井を造るとともに、ここを水源とする上下之割用水を整備した。この用水からは多くの用水が分かれて田を潤し、後の時代まで農業に欠かせないものになった。</p>		




水元小合溜と水元公園(平成26(2014)年)

	<p>あつみ きよし 渥美 清 昭和 3 (1928) ~ 平成 8 (1996) 年</p>	<p>俳優</p>
<p>葛飾区柴又を舞台にした映画『男はつらいよ』で主演</p> <p>『男はつらいよ』の主人公である車寅次郎(「寅さん」)を演じた俳優。演劇俳優として舞台経験を積んだ後、浅草でコメディアンとなる。この後、テレビドラマやバラエティ番組、映画へと活躍の場を広げた。昭和 43 (1968) 年、山田洋次脚本のテレビドラマ『男はつらいよ』の主演を務める。翌年に映画化され、平成 7 (1995) 年までに 48 作品が公開された。『男はつらいよ』は、「一人の俳優が演じた最も長い映画シリーズ」としてギネス世界記録に認定されるなどの記録を残す大ヒット作となり、舞台の柴又は全国的に有名になった。『男はつらいよ』での人情味豊かな演技で広く国民に喜びと潤いを与えたことから、亡くなった翌月の平成 8 (1996) 年 9 月に国民栄誉賞を受賞した。翌年に開館した「葛飾柴又寅さん記念館」には多くの人が訪れている。また、平成 11 (1999) 年には地元商店会と観光客の募金により京成柴又駅前に「フーテンの寅」像が設置されるなど「寅さん」は人々に愛され続けている。</p>		



京成柴又駅前の「フーテンの寅」像

	<p>いそが い ちゅう じ ろ う 儀貝 忠次郎 明治 4 (1871) ~ 昭和 15 (1940) 年</p>	<p>ほりきりえん 堀切園園主</p>
<p>現葛飾区堀切出身、在住、堀切 菖蒲園の前身である堀切園を開園</p> <p>現在の堀切菖蒲園の前身である堀切園の初代園主。堀切村(現堀切)で花の栽培としめ飾り作りを行っていた農家に生まれる。明治 25 (1892) 年頃、忠次郎の代で花栽培の専業となり堀切園を開いた。昭和 5 (1930) 年の堀切園では花菖蒲栽培だけでなく、旅館や料亭も営むようになっていた。また、昭和初期には毎年盆踊り大会が開催され、人々の行楽地にもなっていた。忠次郎の死後に堀切園を受け継いだ息子の庄太郎は、昭和 17 (1942) 年、戦時下の食糧難のため菖蒲園が水田となった時、江戸時代に開発された花菖蒲の貴重な品種を疎開させて守り、旅館を続けながら園を維持した。終戦後、庄太郎は疎開させていた花菖蒲を植え戻し、昭和 28 (1953) 年、有限会社堀切菖蒲園と名を改めて観光旅館とともに営業を再開した。この後、昭和 35 (1960) 年に都立公園となり、昭和 50 (1975) 年には葛飾区立公園となった。忠次郎が開いた菖蒲園は、戦時下の廃園の危機を乗り越えて江戸時代の花菖蒲を伝え、現在、多くの人々でにぎわう観光名所となっている。</p>		



「彩色絵葉書 堀切花菖蒲(堀切園)」(明治時代末期)

	いわた とうしち 岩田 藤七 明治 26 (1893) ~ 昭和 55 (1980) 年 現葛飾区堀切で制作活動	ガラス工芸家
-----------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------	--------

色ガラスを素材として美術品を制作するガラス工芸家の日本におけるパイオニア。食器など実用品の素材とされていたガラスを活用し、日本的な造形美を追求した作品を発表し続けた。大正 7 (1918) 年、東京美術学校 (現東京藝術大学) 金工科を卒業。同年、西洋画科に再入学し、大正 12 (1923) 年に卒業した。卒業の頃からガラス工芸に興味を持ち始め、色ガラスの調合や製法を学んだ。昭和 2 (1927) 年に独立し、南葛飾郡南綾瀬村 (現堀切) に工房を構えた。昭和 6 (1931) 年、同地に岩田硝子製作所を設立 (後の岩田工芸硝子株式会社、平成 12 [2000] 年閉鎖) して制作に取り組む。当初は色ガラスを使用して鉢・碗・壺などを制作し、昭和 30 年代以降は形や色彩のバリエーションに富む個性的な作品を発表した。また、壁面を色ガラスで飾る「コロラート」を生み出し、ガラスの近代建築への応用という新しい分野を開拓した。昭和 45 (1970) 年には文化功労者の顕彰を受けた。




「貝」(昭和36 [1961] 年)

	トーマス・J・ウォートルス てんぽう 天保 13 (1842) ~ 明治 31 (1898) 年 現葛飾区小菅でレンガ造りを指導	建築技師
-----------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------	------

アイランド生まれのイギリス人建築技師。元治元 (1864) 年頃来日し、薩摩藩の砂糖工場の建設や灯台の設計に当たった。明治元 (1868) 年、明治政府に雇われてから明治 8 (1875) 年に日本を去るまで、大阪の造幣寮工場など様々な建築の設計・指導を行う。明治 5 (1872) 年、火災によって焼失した銀座の一角を、レンガを使用した燃えにくいヨーロッパ式の街にする計画が立てられ、建設の責任者となった。この銀座煉瓦街で使用するレンガを確保するため、小菅村にあったレンガ工場 (現小菅の東京拘置所) に赴き、指導を行う。この結果、西洋式の窯 (日本初のホフマン窯) 3 基が設置され、質の良いレンガの大量生産が可能となった。銀座煉瓦街は当初の計画より縮小されたものの、小菅で製造されたレンガなどで建設された。なお、大正 12 (1923) 年の関東大震災によって銀座煉瓦街は失われている。ウォートルスがもたらした西洋技術によるレンガ造りは、「葛飾の文明開化」の象徴であった。




明治11 (1878) 年以降の小菅のレンガ工場

	かさい きよしげ 葛西 清重 12 世紀後半 ~ 13 世前半 葛飾区域を含む中世の葛西地域の領主	武士
-------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------	----

鎌倉幕府の初代将軍となった源頼朝の重臣。平氏追討や現在の東北地方を支配していた奥州藤原氏攻めなどに参加した。奥州の治安維持に当たるなど重要な役割を担い、頼朝の死後も古くからの重臣として幕府を支え続けた。葛西氏は、武蔵国秩父郡 (現埼玉県秩父郡を中心とした地域) を拠点とした平氏の流れをくむ一族である。治承 4 (1180) 年頃、清重は父の豊島清元が治めていた葛西地域を継承し、地名の葛西を名字として豊島氏から独立した。12 世紀後半頃、清重が葛西地域の一部を伊勢神宮に寄進したと考えられており、寄進された地域は伊勢神宮などの所領を表す「御厨」を付けて「葛西御厨」と呼ばれるようになった。鎌倉時代の葛西御厨は、伊勢神宮の所領を葛西氏が現地で支配する形であった。四つ木にある西光寺の墓地には、清重を葬ったと伝えられている墓が残っている。




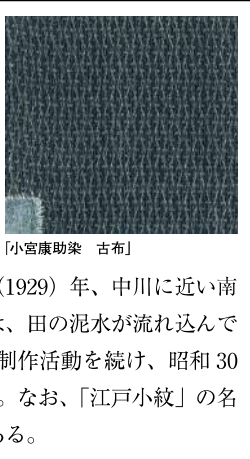
葛西清重墓所 (四つ木1丁目)

	かわせ ひではる 河瀬 秀治 てんぽう 天保 10 (1839) ~ 昭和 3 (1928) 年 葛飾区域を含む小菅県の県知事を務める	官吏
-------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------	----

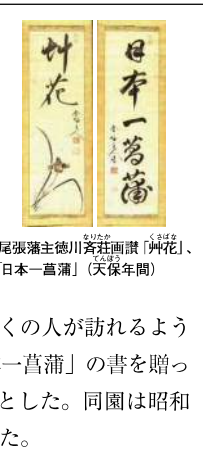
幕末維新期は丹後国宮津藩 (現京都府) の重臣、明治時代初期は政府の官吏 (役人)、退官後は実業界など多方面で活躍し、地方行政、産業振興や日本美術の振興など幅広い分野で事績を残した。田辺藩の武家に生まれ、10 歳で河瀬家の養子になり宮津藩に仕えた。明治時代に官吏となり、明治元 (1868) ~ 明治 4 (1871) 年まで武蔵知県事、小菅県権知事、小菅県知事を歴任して葛飾区域を管轄。県庁の役人を対象とした小菅県立仮学校を正覚寺 (現小菅) に設置した他、一般有志や県庁の役人から資金や米を募って貯蓄しておき災害時に施す「報恩社法」を定めるなどした。「報恩社法」は一種の社会福祉事業であり、明治 4 (1871) 年 7 月の風水害の際には救助米が施された。小菅県知事を退いた後は、明治 14 (1881) 年まで官吏として地方行政や産業振興を担当した。

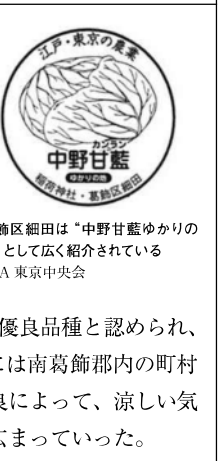



小菅県庁跡の松並木 (昭和12 [1937] 年頃)


	<p>こみや こうすけ 小宮 康助 明治 15 (1882)～昭和 36 (1961) 年</p>	<p>染色家 えんどこもん (江戸小紋)</p>
<p>葛飾区西新小岩在住、制作活動</p>		
<p>遠くからは無地に見えるほど細かい模様の反物である「江戸小紋」制作の第一人者。布地を染色する前、模様とする部分に防染のりを付ける「型付け」の名人の下で幼少の頃より修業し、明治 40 (1907) 年に独立した。明治 43 (1910) 年頃、化学染料を使用した「しごき染め」が実用化されると、いち早くこれを取り入れ、それまで染物屋が行っていた布地の染色も自ら行うようになった。大正 12 (1923) 年、関東大震災で浅草にあった作業場が大きな被害を受けたことから、昭和 4 (1929) 年、中川に近い南葛飾郡奥戸村 (現西新小岩) に作業場を移転した。移転の理由は、田の泥水が流れ込んでいた用水路の水が利用しやすいためであった。以後、同地にて制作活動を続け、昭和 30 (1955) 年には重要無形文化財保持者 (人間国宝) に認定された。なお、「江戸小紋」の名称は、認定の時に他の小紋と区別するために付けられたものである。</p>	 <p>「小宮康助染 古布」</p>	


	<p>しみず こうたろう 清水 幸太郎 明治 30 (1897)～昭和 63 (1988) 年</p>	<p>染織家 ながいたちゅうがた (長板中形)</p>
<p>葛飾区四つ木在住、制作活動</p>		
<p>長板中形の第一人者。「長板」は模様とする部分に防染のりを付ける「型付け」で使用する約 7 m の板のことで、「中形」は小紋より少し大きめの模様という意味。小学校卒業後、父の下で長板中形の型付けを修業した。昭和 3 (1928) 年、父の作業場の移転に伴って南葛飾郡本田町 (現四つ木) に移り住み、昭和 11 (1936) 年に家業を継いだ。昭和初期から布地の大量生産が可能となり仕事は減ったが、手間のかかる長板中形を制作し続けた。昭和 30 (1955) 年、重要無形文化財保持者 (人間国宝) に認定される。寸分の狂いもなく型紙を置き、布地の表と裏が同じ模様になるようなりのりを付ける技は高く評価された。没年まで長板中形の保存に情熱を燃やし、葛飾の地で制作を続けた。</p>	 <p>「京追掛紗織地絵文浴衣」 (昭和 27 (1952) 年)</p>	



<p>いざ えもん 三代目 伊左衛門 生没年不詳 (江戸時代末頃)</p>	<p>農家</p>
<p>現葛飾区堀切出身、花菖蒲の品種改良に尽力</p>	
<p>19 世紀前半に作られた堀切で最初の菖蒲園 (後の小高園) を父親から受け継ぎ、花菖蒲の品種改良に力を尽くした。武蔵国葛飾郡堀切村 (現堀切) にて花の栽培を行う農家に生まれ、花菖蒲の栽培に取り組んだ先代の伊左衛門より菖蒲園を受け継いだ。19 世紀半ば、現在のように複雑な花の形を持つ花菖蒲の品種を作り出した旗本・松平定朝から苗を買い求めて栽培するなど、新しい品種の収集や品種改良に取り組んだ。見事な花を咲かせていた伊左衛門の菖蒲園は評判となり、江戸幕府 12 代将軍である徳川家慶と後に 13 代将軍となる家定の親子が鷹狩りの休憩で立ち寄った他、多くの人が訪れるようになった。同園を訪れた尾張藩の藩主は、自らが書いた「艸花」「日本一菖蒲」の書を贈っている。伊左衛門の菖蒲園は子孫に受け継がれ、園名を「小高園」とした。同園は昭和 17 (1942) 年に廃園となったが、それまでは観光名所としてにぎわった。</p>	 <p>尾張藩主徳川齊荘画讃「艸花」、 「日本一菖蒲」(天保年間)</p>

<p>なかの こうすけ 中野 藤助 天保 14 (1843)～大正 5 (1916) 年</p>	<p>農家</p>
<p>現葛飾区細田出身、在住、同地でキャベツの新品種を開発</p>	
<p>明治時代、秋に種をまいて翌年の春に収穫するキャベツの品種「中野甘藍」を開発した。西洋の農作物を育てるため明治政府が設置した三田育種場 (現港区) を訪れたことから西洋野菜に興味を持ち、明治 15 (1882) 年頃から自宅周辺で西洋野菜の試作を行う。特にキャベツに注目して種子を取り寄せ、多数の品種を試作した。明治時代半ばになるとキャベツの需要が急増し、初夏になるとキャベツが品不足となった。このため息子とともに春に収穫できる品種の研究を進め、育成に成功した。この品種は南葛飾郡金町村 (現金町) にあった東京府農事試験場分場で優良品種と認められ、「中野甘藍」と名付けられた。中野甘藍は広く普及し、明治時代末には南葛飾郡内の町村で栽培されていた。息子、孫へと受け継がれた中野家 3 代の品種改良によって、涼しい気候を好むキャベツは暖かい地域でも栽培できるようになり、全国に広まっていった。</p>	 <p>葛飾区細田は「中野甘藍ゆかりの地」として広く紹介されている ©J A 東京中央会</p>

	<p>ばいしょう ちえこ 倍賞 千恵子 昭和 16 (1941)年～ 葛飾区柴又を舞台にした映画『男はつらいよ』に出演</p>	<p>女優 歌手</p>
<p>映画『男はつらいよ』において主人公である車寅次郎の妹・さくらを演じた女優。松竹音楽舞踊学校を首席で卒業後、松竹歌劇団 (SKD) へ入団。昭和 36 (1961) 年、松竹にスカウトされて映画デビュー、翌年には歌手デビューを果たす。『遙かなる山の呼び声』『男はつらいよ 寅次郎ハイビスカスの花』での第 4 回日本アカデミー賞最優秀主演女優賞 (昭和 56 [1981] 年)をはじめ、多くの映画賞を受賞。この他、アニメ映画の声優、ミュージカルやテレビ CM への出演、執筆活動など幅広く活躍している。平成 17 (2005) 年に紫綬褒章、平成 25 (2013) 年には芸術文化の功労者として旭日小綬章を受章した。「柴又は私にとって故郷であり、役者としての原点」と語っている。また、平成 27 年 (2015) 11 月、『男はつらいよ』のロケ地 12 地域が柴又に集結して開催された「寅さんサミット」ではトークセッションに参加するなど、柴又の魅力を発信し続けている。</p>		<p>No image</p> <p>「男はつらいよ 葛飾立志篇」でさくらを演じる倍賞千恵子 (昭和50 (1975) 年)</p>

	<p>ふじた きょうへい 藤田 喬平 大正 10 (1921)～平成 16 (2004) 年 現葛飾区宝町で制作活動</p>	<p>ガラス工芸家</p>
<p>国内外の展覧会への出品とともに、日本ガラス工芸協会会長を務めるなど多方面から日本のガラスアートをけん引した。昭和 19 (1944) 年、東京美術学校 (現東京藝術大学) 工芸科彫金部を卒業後、ガラス工芸家を志す。昭和 22 (1947) 年、現代ガラス工芸の第一人者で遠縁に当たる岩田藤七が葛飾に設立した岩田硝子製作所に入社。しかし、ガラス工芸家を目指していたため、昭和 24 (1949) 年に退社して独立。三和特殊硝子 (現宝町) の工場を時間単位で借りて制作活動を始めた。独立した当初は生活が苦しく、工芸品を制作する一方、収入を得るため実用品のコップや花瓶を作り自ら行商に出ていた。この後、作家としての評価を飛躍的に高めた「虹彩」(昭和 39 [1964] 年)、代表作となる飾篭シリーズの最初の作品「菖蒲」(昭和 48 [1973] 年)を葛飾の地で制作した。晩年まで作品を作り続け、平成 14 (2002) 年、ガラス工芸家として初の文化勲章を受章した。</p>		<p>No image</p> <p>東京国立近代美術館所蔵 Photo: MOMAT/DNPartcom</p>

	<p>ひらくし でんちゅう 平櫛 田中 明治 5 (1872)～昭和 54 (1979) 年 現葛飾区宝町で制作活動</p>	<p>彫刻家</p>
<p>107 歳の生涯を現役で貫いた、日本近代木彫界の巨匠。小間物問屋の奉公に出ていた大阪で木彫の手ほどきを受けたことがきっかけとなり、彫刻の世界に入った。明治 30 (1897) 年に上京した後、名だたる彫刻家の仕事を見ながら独学で学ぶ。昭和初期以降は、形の単純化と彩色を施すことによって木彫の新境地を切り拓いた。昭和 14 (1939) 年、上野にあった材木置き場を明け渡し、葛飾区本田宝木塚町 (現宝町) に材木置き場とアトリエを新設した。この後約 30 年間、上野から葛飾へ通い、日本の近代木彫の最高傑作と称賛される「鏡獅子」(昭和 33 [1958] 年)をはじめ多くの名作を生み出した。昭和 37 (1962) 年には文化勲章を受章。昭和 45 (1970) 年に東京都小平市へ住居とアトリエを移したため葛飾を訪れる機会はなくなったが、葛飾のアトリエは没後に取り壊されるまで弟子の作業場として活用された。</p>		<p>No image</p> <p>「鏡獅子」(昭和33 (1958) 年)</p>

	<p>ほそ え えいこう 細江 英公 昭和 8 (1933)年～ 現葛飾区東四つ木、四つ木、西亀有に在住歴</p>	<p>写真家</p>
<p>人間の肉体と精神、生と死を一貫したテーマとする、国内外で活躍する写真家。昭和 14 (1939) 年、葛飾区本田江江町 (現東四つ木) に転居。同年、父が四つ木白鬚神社の管理人となり、同地に転居する。富士フォトコンテストでの学生の部最高賞受賞を契機に写真家を志した。東京写真短期大学 (現東京工芸大学) 卒業後は多くの斬新な作品を発表。昭和 32 (1957) 年、葛飾区砂原町 (現西亀有) に転居し、昭和 39 (1964) 年まで同地で暮らした。作家の三島由紀夫を被写体とした『薔薇刑』は、葛飾在住時の昭和 38 (1963) 年に発表された写真集で世界的に高く評価されている。昭和 45 (1970) 年、写真集『鎌鼬』で芸術選奨文部大臣賞を受賞した。平成 15 (2003) 年、世界を代表する写真家 7 人の 1 人として英国王立写真協会創立 150 周年特別賞を受賞し、平成 19 (2007) 年には旭日小綬章を受章した。平成 22 (2010) 年には文化功労者の顕彰を受けた。</p>		 <p>「薔薇刑」[作品32番] (昭和36 (1961) 年)</p>